

中国における女性ホモソーシャルの実態

—湖南省公立高校の女子高校生を対象として—

WANG Ziyang

本研究は、文系クラスと理系クラスにおける女子生徒間の「女性のホモソーシャル」を中心に、性別比率がクラスの雰囲気および女子生徒間の感情的絆に与える影響を探究するものである。中国の高校環境における性別文化を分析することを通じて、本研究は、性別構造が学校という相対的に閉鎖的な場において、女子生徒間の関係の形式、社会的支援のモデル、およびその対抗戦略をいかに形作るかを明らかにすることを目的とする。

理論的な観点から、本研究は東園子が提唱した「女性のホモソーシャル」という社会学概念を基に展開している。従来のホモソーシャルは、通常男性間の社会関係を指し、特に家父長制社会において女性や同性愛者を排除しつつ維持される男性同士の絆を意味する。一方で、女性間の感情的および社交的な関係は、このホモソーシャルの概念と一定の重複があるものの、その特異性は既存の理論において十分に分析されていない。「シスターフッド」や「レズビアン連続体」といった関連概念に比べて、「女性のホモソーシャル」は女性間の関係性を、理想化することなく、その複雑性や多様な表現形態を包括的に捉えることが可能である。このため、本研究では、この概念を分析フレームとして採用し、従来の視点の限界を超えることを目指している。

研究方法としては、本研究は質的研究方法を用い、中国の大学入試の競争が激しい湖南省のある高校の文系クラスおよび理系クラスの女子生徒を対象に半構造化インタビューを実施し、その内容を分析した。インタビューは、クラス内の性別比率、クラスの雰囲気、学業競争、および社交的なパターンを中心に展開され、性別比率が女子生徒間の関係に与える直接的および間接的な影響に焦点を当てた。

研究結果として、文系クラスと理系クラスにおける「女性のホモソーシャル」には顕著な違いが見られた。文系クラスでは、男子生徒の人数が少ないため、クラスの雰囲気は主に女子生徒によって主導されている。友情の形式は学業支援を中心としており、女子生徒間の競争は比較的少なく、関係はシンプルかつ明瞭である。一部の女子生徒は「親愛的」(ダーリン)、「宝贝」(ベイベー)などの親密なニックネームを友人同士で使用することで友情を強化しており、これは伝統的な性別規範にお

ける親密関係の境界を曖昧にし、「非性別化」された社交特性を示している。

これに対し、理系クラスでは、男子生徒が多数を占め、性別化されたクラス文化が女子生徒間の感情的な絆に顕著な影響を与えている。女子生徒間の交流は男子生徒の存在による干渉を受け、「人気」評価や恋愛話題がより複雑な競争や支援のパターンを生み出している。例えば、ある女子生徒は友人が月経に関する嘲笑を男子生徒から受けた際に即座に抗議し、友人を擁護した。このような行動は、男子主導の文化への抵抗であり、女子生徒間の団結を強化する役割を果たしている。また、理系クラスでは、「～哥」(～兄さん)や「大哥」(あにき)といった男性的な呼称が性別を問わず親密さを表現するために使用されており、これは中国における男性中心文化の影響を反映すると同時に、女子生徒がその文化に順応し、その枠組みの中で行動せざるを得ない様子を示している。

以上の考察を踏まえ、本研究は文系クラスと理系クラスの比較分析を通じて、性別比率がクラスの雰囲気や女子生徒間の感情的な絆において多面的な役割を果たしていることを明らかにした。この発見は、「女性のホモソーシャル」概念の理論的内包を豊かにするとともに、中国の学校という特殊な場におけるジェンダー文化研究に新たな視座を提供するものである。

しかしながら、本研究にはいくつかの限界が存在する。研究対象の数が限られており、主に質的研究手法に依拠しているため、結果の普遍性には制約がある可能性がある。今後の研究では、対象のサンプルを拡大し、文化的背景の多様性を取り入れることでさらなる検証が可能である。また、量的研究手法を組み合わせることで、研究結果の広範な適用性を高めるとともに、異なる教育システムや社会文化的背景が学校のジェンダー文化に与える影響についても深く探る必要がある。

それにもかかわらず、本研究は中国の教育分野におけるジェンダー文化研究において重要な一歩を踏み出したといえる。性別比率と女子生徒間に関する微視的な分析を通じて、「女性のホモソーシャル」概念の実践的応用に新たな視点をもたらし、学校におけるジェンダー平等の促進や心理的サポート体制の構築に向けた実践的な参考資料を提供するものである。